椎名麟三全集

7

椎名麟三全集

7

小説 7

冬樹社

椎名麟三全集 7

昭和四十六年六月三十日初版第一刷発行

著　者—椎名麟三
発行者—高橋直良
発行所—冬樹社　東京都千代田区神田神保町二—一八
　電話東京二六四—〇三四六　振替東京七七五七
印刷所—三容堂印刷株式会社
製本所—一重製本株式会社
装幀者—栃折久美子
写　真—林忠彦
定　価—二〇〇〇円
© Rinzo Shiina 1971
0391-02007-5190

第七巻目次

待合室……3
被害者……27
悪魔……49
狂った季節……77
おかしな狂人……101
人生の背後に……107
情熱……131
門のある家……149
潔白な遺書……167
公園の詩人……193
明日なき日……221

昼と夜……373
自分を探す男……399
証人……427
砂入りの手紙……445
黄色い汗……485
青い布切れ……527
解説……武田泰淳……561
解題……573

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説 7

待合室

1

井上洋品店は、新宿に近い電車通りにあった。はやらない店だったのに、どこから金を都合したのか、最近、店先を改造して、ショウウィンドウも急にしゃれたものになり、夜になるとゆるやかな半月形のガラスの向うに、ワイシャツやらシャツやらストッキングやらマフラーなどが、オペラの舞台にでも登場したように、左右上下から螢光燈の明るい光をあびていた。

ただひとりの女店員の山本晴子は、店内のケースの上に積み上げてある品物へバタバタ羽根ばたきをかけていた。もう二十五で、年よりちょっとふけた感じであったが、眼だけは美しかった。それは丸く大きく澄んでいた。しかしそれは、すべてが見えるといった聡明な感じではなく、すべてが警戒もなくゆるやかにその眼のなかへ入って行くといったようなあたたかい感じだった。よく、店へ来る問屋の年とった外交員は、その彼女を見ると、親身な声で危なそうにこういうのだった。

「晴子さん、だまされるなよ、男に」
だが、晴子は、善良な声で笑った。あるときは、秘密そうな声でこう答えた。
「もう、三万円たまったわよ」
「そ、そんなこと、ひとにいうんじゃないよ」と外交員は、妙に眩しそうなひるんだ声でいった。「わたしだって、妙な気がするじゃないか。わたしは、一万四千円の月給で、まだ中学へ行っている子供を二人もかかえているんだからな」
「妙な気？」
「そうだよ」と老外交員は、ますますあわれな声になっていった。「三万円もあれば、世のなかには、だましてとってやろうとするやつもいるだろうからな」
「大丈夫よ！」と晴子は、自信ありげに笑いながらいった。「もう一年、ここにつとめて、五万円になったら洋裁学校へ行くつもりなのよ。夜学もあるけど、どうしても昼間の本科へ行きたいの。夜だけアルバイトして」
「嫁入りの金に貯めているのじゃないのかい」
「ちがうわ。わたしなんか婚期におくれてしまったし、たとえ結婚出来ても、手にちゃんと職をつけておきたいの。姉さんのようになりたくないんだもの」
そして晴子は、いまも、商品へ羽根ばたきをかけながら考えていた。
「こんなところで、いくら働いていても何も身につかないわ。早く洋裁学校へ行かなきゃあ。そうすれば、宇都宮へかえっても、あの大きな洋装店でも働けるようになれるし」
晴子は、もともと東京に住んでいたのだが、女学校二年のとき、深川で戦災に会って、木工所で働いてい

た両親とともに宇都宮へ疎開したのである。そこでやっと女学校を卒業すると、結婚して大阪にいる姉を頼って行き、幸い、食堂の店員の口があったので、姉の家から二年ばかり千日前のその店へ通っていたのである。

だが、姉は、夫のちょっとした浮気から感情をこじらせ、その上そのなかへ入った夫の親戚のものがそれをのっぴきならないものに拡大してしまったので、結局別れ話になり、姉は、そこで十七の年まで育った東京へ出て来たのである。

晴子は、勿論、姉のいないその家にはいることは出来なかった。しかも食堂の給料は、四千円ほどだったので、ひとりで部屋を借りて暮して行くことも出来なかった。仕方なく一度は、いまは、宇都宮の工場の雑役をしてやっと暮している両親のもとへかえったが、家の貧しさを見ると、とても家にごろごろしているわけに行かないので、また姉を頼って東京へ出て来たのである。だが、アパートに住んで、ボタン工場の事務員をしながら暮している姉の生活は、男出入りも多く相当荒れていた。事務員といっても、実は、銀座や新宿の服飾店へ品物をとどける配達役のようなものなので、それらの得意先でいろんな男と知り合っている様子なのだった。晴子は、姉へ賢人のような顔でいった。

「姉さん、いいひとがあるなら、結婚した方がいいんじゃない？」

すると姉は、いらいらした声で答えた。

「わたしぐらいの年になると、相手は、みんなおくさんや子供のあるひとばかりなのよ。それでなくても三十代の女は、戦争のおかげで、結婚難だと、新聞にもちゃんと書き立ててあるじゃないの」

そのとき、晴子は、自分も、もう二十四になってしまっているという事実におどろいたのだった。

「いままで、あっちこっちうろついて、あんまりぼんやり暮しすぎてしまったんだ」と晴子は考えた。「両

親は、あんな風だし、姉さんは、姉さんでこんな風だし、とにかくわたしだけは、しっかりしていなければならない」

そして晴子は、姉の工場の主人のつてで、井上洋品店の住込店員になった。給料は、大阪にいたときと同じ四千円だった。ただ、食べさせてもらえる点だけ、よかったと思った。

それから一年あまりたった。だが、給料は一向上らず、やはり四千円だった。だが、晴子は別に悲観もしていなかった。彼女は、あまり窮屈にものを考えないたちだったし、それに洋裁学校へ行くという確乎とした目的もあったからである。

主人の井上正明が、ぼんやり表から帰って来た。

「また、スマート・ボールですか」と晴子はきさくにいった。

「ああ」と正明は、いつもの憂鬱な声で答えた。「店は、どうだったい？」

「ええ、ひまで」

「電車通りなんだけど、やはりここは場所が悪いんだなあ」

それから正明は、新しいショウウィンドウの戸をがらりとあけて品物を置きかえはじめた。その彼の顔は、螢光燈に照し出されて、商店主にありがちな蒼白い顔が、一層蒼白く見えた。それはまるで何かの病気にかかっているようにさえ思われたのである。その晴子には、その主人が三ヵ月ほど前、妻と死別して以来、だんだん駄目になって来たように思われてならなかった。もとから口数の少ない男が、一層ひどくなって、何かとりかえしのつかない思いにとらわれている感じだったのである。正明は、品物の置きかえた様子をたしかめるように、表へ出てそのショウウィンドウへ見入っていたが、やがてふたたび店へ入って来ると、暗い投げ出すような声で呟いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「やはり、この店は、駄目なんだ」

晴子は、その声に自分でも意外なほどのショックを感じた。その主人の低い呟き声は、自分の未来のかたい目的へまでも、ビリビリひびいてひびわれてしまったようにさえ思われた。彼女は、姉の顔を思いうかべた。もし、この店が駄目になるとすれば、次の働き口があるまで、姉のアパートへ厄介になるより仕方がない気がしたからである。彼女は、こわばった情ない声で、思わずいった。

「どうしたらいいんでしょ」

正明は、事務机の前にかえって、椅子に腰を下した。そして帳簿を意味もなくひろげていたが、ふいにいった。

「近所の奴、みんな笑ってやがるだろうな。先刻、スマート・ボールの店を出て来たら、金正のおやじに会ったんだ。するとあのおやじも、いきなり、あんたは、商売に向かんなというんだよ」

「そんなことありませんわ」と晴子はいった。

「いや、おれの親戚もみんなそういったんだ、この店をはじめるときに」

若い女学生風の女が二人店へ入って来た。二人は、べちゃべちゃ喋りながら、晴子へさんざん靴下を出させたあげく、結局何も買わずに出て行った。正明は、失望したように奥へ入って行った。晴子は、店の椅子へ腰を下した。すると彼女は、ほんとうにもう何も彼も駄目になった気がしていた。

そのとき正明は、ふいに奥から出て来ると、熱心な顔でいったのである。

「晴子さん、君、渋川まで行って来てくれないか？」

「渋川？」

「そうだよ。今晩でも、上野から立って」と正明は、いらいらした声でいった。「どうしても負けられない

んだよ、おれは、この店、じゃんじゃんはやらせて見せなけりゃならないんだ。池袋のまま母の店に、負けられやしないじゃないか。あの女は、父が死ぬと、おれなんかでは駄目だといって、うまうまあの店を乗っとってしまったんだぜ。そしておれを、あの店におられなくしてしまったんだぜ。はやってるのは、場所がいいだけだのに、あの女は、自分の腕のせいだと思ってやがるんだ。おれは、どうしてもそうじゃないということを証明して見せなけりゃならないじゃないか、え？」

「渋川って、おくさんがおなくなりになった？」

正明は、ふいに眼を落して、うとましげな声でいった。

「ああ、ああ、あ。そうだよ」

晴子は、主人の妻を思いうかべた。彼女がここへ勤めはじめたころは、その妻は、女中だった。長野県の伊那から東京へ出て間もないとかいうことで、ズラ弁をつかっていた。小柄で、太っていて、美人という方ではないが、肌が白かった。その肌を十九という若さが、実際以上に輝やかせていたようだった。そしてたしかに、晴子がここへつとめはじめたころにはもう、正明と関係があったようだったのである。

「ほんとにね」と晴子は同情するようにいった。「あんな、御丈夫なおくさんが、旅先で心臓まひでなくなられるなんて」

正明は、はげしい口調でその晴子をさえぎった。

「いいんだよ！　もう、そんなことは！」

晴子は、その主人の勢いに圧されたようにだまった。すると正明は、その彼女へとりなすようにいった。

「行ってくれるね、渋川へ」

「ええ、でも」と晴子は何となく不安を感じてとまどった。「旦那さまがいらっしゃって、わたしがるす番

していても、よろしいけど」
「行ってくれ」と正明は押えかねた声でいった。「金を受取ってくるだけなんだから」
「お金を？」
「そうなんだよ」と正明は、ふたたび眼を落しながらいった。「渋川駅の待合室で、相手のひとが待っているから、そのひとから受取ってくれれば、いいんだよ。二百万円からの大金だからな」
晴子の心に緊張とも不安ともつかない感情が起った。それはあくまで二百万円という大金をもって旅行しなければならないことから起っていた。だが、同時に彼女は、理由もなく、彼の妻が死んだ後、店舗の改造が行われたことを思い出して、そのことにもある不安も感じたことは事実だった。正明は、その彼女の心も知らず、熱心に喋り立てていた。
「いまから、行ってくれれば、上野発十一時の上越線に乗ることになる。だから渋川は夜中だ。二時半ごろだからな。だから待合室は、ほとんどひとはいないよ。だからそのひとはすぐわかるよ。三十すぎの、おれみたいな男だ。ちゃんと連絡は、とっておくからな、電報で」
「渋川の待合室におれば、いいのですね」
「そう、そう」と正明は、はずんだ声でいった。
その正明の蒼白い顔は、思いがけなく上気していて、酒にでも酔っぱらっているようだった。そして事実、彼は、珍らしく晴子の肩をたたきさえしたのである。
「晴子さん、その金が来たら、店をきっと立派にして見せるぜ。じゃんじゃん宣伝して、はやらせて見せるぜ。晴子さんも働き甲斐があるようになるだろう。そうなれば、給料の方も必ず上げるよ」

2

もう夜の九時半だった。正明からせき立てられるように旅仕度をした晴子は、ボストンバックを提げて新宿駅へやって来た。彼女は、ちょっと心配もしていたが、晴れがましい気もしていた。店主の正明は、旅費だといって五千円も呉れたからである。彼女は、渋川までの切符を買った。千円札を出すと、七百四十円の釣銭が来た。瞬間、何か食べるとしても、この旅行に往復千円もかからないだろうと思えた。すると彼女には、あまった余分の千円札四枚が眼に見えて来て、嬉しいのやら悲しいのやらわけのわからない妙な気がした。彼女は、山手線の電車のなかでも、正明が旅費をくれたときのことを思い出しながら、何度も考えていた。

「あのひと、旅費にやるとおっしゃったんだけど、あまったのならかえさないとわるいかしら。でも、旅費にやるとおっしゃったんだから、もらっていいんだわね、あまっても。それともやっぱりかえさないとわるいかしら」

そのとき晴子はふいに男から声をかけられたのである。

「山本さん、どこへ？」

問屋の年とった外交員だった。彼女は、何故となく赤くなりながら彼女の前の吊革にぶら下った彼へいった。

「あっ、おじさん」

「どこへ行くんだい？」と外交員は気弱い笑いを見せながらいった。

外交員は、安物らしいが買ったばかりといった新しいねずみ色のオーバーを着ていた。だがそれにもかかわらず、ひどく塩たれた感じがした。何を着ても駄目な人間があるが、彼はその部類らしかった。彼女は、その彼の様子にやっと自分をとり戻したようにはずんだ声でいった。

「渋川へよ」

「渋川？　……上越線の？」

「ええ」

老外交員は、ぎいぎい軋る釣革が気になるように動かして見はじめた。

「な、山本さん」と彼はやっといった。「あんたが金をためてるんだというんで、いままでいいそびれていたんだが、わるいことといわないから、あの店やめた方がいいと思うな」

晴子は、思わずびっくりしたような声を出した。

「どして？」

「やめた方がいいな、すぐ、あの店は」と彼は、ぼんやり繰り返した。

晴子は不安になっていった。

「どうかしたの。お店。わたしあんな働きいいお店、ちょっとないと思ってるのよ」

「そりゃそうだろ……だからさ」

晴子は、不安になって老外交員の顔を見上げた。小さなしなびた顔をしていた。外交員は、ひるんだような顔をしていった。

「いや、お宅のお店が改造になる前だったよ。お宅の店の御主人、わたしにこうおっしゃったんだ。この店つづけていても、もう何の意味がないということがはっきりしたよ、ってね。自分は、商売には向かんのだ

ともおっしゃってたな。ところが、いつかお店の方へ廻って行くとお店を立派に改造しておられるんだろ。わたしはびっくりした。何かいやらしい気さえしたな。店をやめられるもんだとばかり思っていたからな」

「池袋の義理のおかあさんのお店に対抗していらっしゃるのよ」

「そりゃ、そうだろ。だが、そのときも御主人はおっしゃった。こんなことに金をかけても何の意味もないんだ、とはっきりおっしゃっていた」

車がとまった。老人は、あわてて窓の外を見た。

「駒込か」と彼は安心したように呟いた。

晴子は、老人のいうことがさっぱりわからなかった。このままでは意味がないから、御主人は何とか立直そうとしていらっしゃるのではないか。わたしが、渋川へ行くのもそのためではないか。そのとき老人はふいにいった。

「意味のないことをする人間というものは何か暗い罪のにおいがするもんだからな」

晴子は、ますます不安になった。店主の正明から受ける感じは、決して明るいものではなかったからである。彼女は、思わずいった。

「おじさん、わたし渋川へ行くの、店の用事なのよ。店をもり立てるためのお金をとりに行くのよ」

「お金！」

「おじさんは、お金というとびくびくするのね」

「いや」と彼は情なさそうな顔をした。「貧乏人根性でな。いつも金がほしい金がほしいと思ってるもんだからだろ」

で、晴子はちょっと意地わるな気持になっていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com